



TITLE:

# 総合的地域研究の概念

AUTHOR(S):

高谷, 好一; 應地, 利明; 掛谷, 誠; 松原, 正毅; 家島, 彦一; 阿部, 健一

---

CITATION:

高谷, 好一 ...[et al]. 総合的地域研究の概念. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 20: 109-117

ISSUE DATE:

1996-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187586>

RIGHT:

# 総合的地域研究の概念

## 1. 研究組織

研究代表者：高谷 好一（滋賀県立大学・教授）

研究分担者：應地 利明（京都大学東南アジア研究センター・教授）

掛谷 誠（京都大学アフリカ地域研究センター・教授）

松原 正毅（国立民族学博物館・教授，地域研究企画交流センター長）

家島 彦一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

阿部 健一（京都大学東南アジア研究センター・助手）

## 2. 研究のねらい・目的

同じ課題のもと、変わらぬメンバーで、過去2年間研究を続けてきた。最終的な研究のねらい・目的に大きな変更はない。地域の全体像・イメージを明確に提示することが目的である。我々はそれが課題として掲げた総合的地域研究の一義的目的であると考えている。

世界にはさまざまな地域が並存している。一つ一つの地域は、それぞれ固有の生態基盤に立脚し、歴史的に独自の価値観・世界観を育んできた。地域が異なればそこに住まう人々の生き様も異なる。地域とは単に空間的な広がりのみならず、共通の考え方をを持った人々の集合体とも考えられる。そして世界にはこのような地域が厳存しているのである。

ただ、地域と地域の間に画然と峻別できる境界があるわけではない。地域の時間的・空間的伸縮により、境目は混然としているのが常である。形をなさない地域も存在し得る。地域を画定することは、総合的地域研究においては目的でも手段でもない。むしろ操作概念としての地域は曖昧なままにしておく方がよい。重要なのは、個々の研究者が知的枠組みを地域に据え、視点を「地域」という水平に置くことである。

今日、世界はあらためてグローバルな一つの纏まりとして捉え直されようとしている。地域を飛び越えて世界の行く末が論議されている。価値観を共有し、全人類的な共通の目的に向かうことが、現在世界の抱える問題群の唯一の解決策、あるいは解決への捷徑のように考えられている。なによりも現実には、世界のここかしこで、政治・経済・文化のあらゆる局面において、グローバリゼーションは進行しつつある。

繰り返すがその世界は本来的に均質ではない。多様な地域の集まりである。時には互いに相容れないような世界観を持つ地域が隣接することもありえる。自己主張の強い外向きの地域もあれば、ひたすらブラックホールのように受身に徹する地域もある。こうした歴史に培われた

地域個性への深い理解と相互尊重なくしては、世界の将来像を描くことは不可能である。その地域も他地域と無関係では存立し得ない。運命共同体として世界をわかつ「地域」、その個性を一つ一つ抉り出し、世界と地域の共存の道を探ることを地域研究の積み重ねの上の一つの到達点として考えて行きたいと思っている。

### 3. 平成7年度の研究経過

昨年度から、「地域間研究の構図」という一連の研究会を行ってきている。東南アジアをピボット地域とし、地域と地域を「比較」することにより、地域の輪郭を際立たせようとする試みである。昨年度は、南アジアと中東とを比較の相手としてとり上げた。そして今年度は中国とアフリカを対象地域とした。

中国との研究会は10月に行った。中国側から3人が話題を提供し、それに東南アジア側の3名がコメントする形で行った。対象地域は中国であるが、今回の地域設定では中国全体でなく、華南を強く意識して話題提供していただいた。中国は、従来北を中心に北の論理で括られた世界として語られていたが、それをあえて南に中心に据えることで、東南アジアとの接点も広がり、また中国に対する見方にも新たな展望が拓けはしないか、という期待があった。カウンターパートである濱下武志氏の発案である。濱下氏には最後の総合討論の司会もお願いした。

まず、中国と東南アジアをダイレクトに結びつけている華僑について、斯波義信氏に華僑史の視点からお話いただいた。華僑と一括りにされる一群の人々が、時間的・空間的にさまざまな様態・性格を持つことを整理した上で、華僑を語る際にしばしば話題になるそのネットワークについて、中国人特有の団結力・結束力、すなわちチャイニーズネスの本質をそこに見るとするならば、それは中国全体でなく華南で生まれソフィスティケートされた華南人の本質であるとした。さらに、開放と発展に向けた中国の未来志向のアイデンティティは華南に移行しており、今日の華僑問題を考えるにしても、中国全体でなく華南という中国の一地域に力点を置かざるを得ない歴史的必然性を指摘した。

立本成文のコメントは、華南という地域の重要性を認めた上で、ネットワークとアイデンティティの問題をとりあげた。華僑ネットワークと称されるものは、システムではなく、むしろアイデンティティに還元されるものであるとした。そうした場合、華僑ネットワークにおけるアイデンティティとは、エコロジーに沿って柔軟に変容してゆく、エコロジカル・アイデンティティとでも呼べるものとして捉えることができる。このネットワークとネットワークング、ネットワークと集団を明確に峻別しなければならないという論点は、エコロジカル・ネットワ

ークという概念とともに、総合討論の場でも詳しく議論された。

次に上田信氏に中国社会史の立場から話題提供していただいた。婚姻関係を基軸に、社会の垂直構造が水平構造に転換される漢族社会の特質を説明し、従来の「中国（漢族）対日本」といった2者間比較の枠に東南アジア（タイ社会）という第三者を組み入れることにより、より立体的な社会像を浮かび上がらせようと試みた。その結果、中国・タイ・日本の親族関係は、それぞれ形容詞的・動詞的・名詞的と要約できる。すなわち、中国は貴賤・上下・長幼といった形容詞的指標で序列化される社会、タイは二者間関係が重視され、何かをし何かをして返すといった作用・反作用の動詞的關係で成り立つ社会、そして日本は「イエ」という名詞への帰属関係の累積で発展してゆく社会と言い表される。

阿部健一のコメントは、東南アジアの中でも、「タイ」でなくマレー世界をとり上げた比較をしたかどうか、というものである。マレー世界は、血族関係を軸とした上下の明確な整序感覚は薄く、人が比較的自由に社会秩序に組み込まれたり、ある時は離脱したりする。秩序自体も状況的で、中心すらも移りゆく社会である。その結果「伝統」を生成する機構というか鑄型というかが本来的に存在しない世界と見ることができる。この点で、東南アジア海域世界は、「伝統」中国と際だった対称を成す。

最後の話題提供は宮島博史氏が、東南アジアと同じく中国の周辺としばしば位置づけられてきた朝鮮史の立場から行った。上田と同じく親族関係に焦点をあて、中国の宗族と朝鮮の同族の精密な比較分析の結果を示した。親族組織としての構造的強さ弱さを、族産に着目して比較、中国の同族関係は朝鮮に比べるとはるかに弱いと結論づけた。その結果、中国は日本や朝鮮よりもはるかに東南アジアに近い類型と見えてくる。

松原正毅は、親族関係の朝鮮と中国の差異に言及した宮島発言を受けて、大きな違いは認めつつ、だからといって中国と東南アジアが近いと結論づけることに疑問を呈した。ユーラシアの民族集団は歴史的に錯綜し親族関係は複雑にからまりあっている。13世紀のユーラシアの大変動を念頭にいれ、むしろ東アジア史という枠組みの中でそれぞれの集団形成の祖型と歴史を捉え直す必要がある。その延長上に東南アジアを「比較」する視点が重要となってくる。

総合討論では、立本の「エコロジカル・アイデンティティ」、「ネットワークと移動」、「陸の世界＝中国、海の世界＝東南アジア」、「ネットワークとネットワーキング」、「移民と同化」、「社会の強さと生態の強さ」などを比較の軸として検討し、東南アジアと中国の「地域」像をそれぞれ浮かび上がらせる議論を行った。討論には、高谷班からは家島彦一、掛谷誠、應地利明が、高谷班外からは、坪内良博氏、川勝平太氏、海田能宏氏、山田勇氏、古川

久雄氏の参加を得た。この研究会の報告・討論は、成果報告書シリーズ No. 17『東南アジアと中国』として出版する予定である。

アフリカとの地域間研究は2月にやはり2日間にわたって行った。市川光雄班との合同研究会である。こと「アフリカ」に関しては、以前、海外学術調査の総括班の主催で「東南アジアとアフリカ：地域間比較の試み」と題して地域間研究会を行ったことがある。その時は、比較の軸を、「植生」とか「農業」・「家畜飼育」とかいったトピックに絞って議論を進めた。しかし今回はアフリカを3つのサブ地域に分け、それぞれの地域の地域たる特質を4人のアフリカ地域研究者にお話いただき、「地域」と「地域」の全体像あるいは本質を「比較」することとした。要素の「比較」でなく「地域」の「比較」を重視した。

三つのサブ地域とは、スワヒリ世界、サヘル、内陸アフリカである。

まず日野瞬也氏（東外大・AA研）に『スワヒリ世界の歴史と展開－東アフリカにおけるスワヒリ化の地域的展開とその機能』と題して話題提供していただいた。スワヒリ文化自体が汎インド洋交易の展開の中でイスラームを軸として成立した点で、東南アジアとの「比較」の枠を決めることが可能だろう。

スワヒリ世界は海岸部から内陸へと展開をしてゆく。汎インド洋交易に伴い東アフリカ海岸部の港でバントゥ文化とアラブを主体とするアジア文化の融合がおこった「スワヒリ形成期」。15世紀以降、約300年間のスワヒリ文化が深化・土着化してゆく「スワヒリ文化の定着期」。その後、海岸部に限定されていたスワヒリ文化がアラブ・スワヒリ商人によって交易ルート沿いに内陸にもたらされ、さらに植民地政策によりスワヒリ化が面的に拡大していった「スワヒリの拡大期」。そしてこの内陸への展開の過程で、スワヒリの構成要素が地域的・時代的に抜け落ち、結果として特徴的な五つの社会類型を構成することになった。とはいえそこにはスワヒリ語という共通言語が通底として存在し、本音としての個々の部族への帰属意識と建て前としての国民意識の両立する世界を形成することになる。

高谷好一のコメントは、マレー世界とスワヒリ世界の違いについて、である。歴史的にスワヒリ化に相応するマレー化は、港を超え内陸まで瞬時に、同時的・同質的に起こった。スワヒリ化に見られる地域的なズレはマレー世界ではなかった。この違いは重要である。奥行きのある「大陸」アフリカと、海と山地が狭い「多島海」東南アジアの生態的違いに起因する。さらに港も、東南アジアの場合、単に外来文化の受容体でなく、生活の場でもある。マレー語は早くから生活の言葉として港の後背に定着している。つまりマレー化は歴史的に完了しているといつてよい。対してアフリカのスワヒリ化は「今をいきており」、現在の地域統合にも効いて

いる、という。もし東南アジアの現在に、同じものを求めるとすれば、ASEANということになるのではないか。ASEANはマレー化の現代的展開でありアフリカにおける今日のスワヒリに相応すると考えられる。

次いで静岡大学の嶋田義仁氏にサヘル地域について「西アフリカの地域構造と世界」と題して話題を提供していただいた。西アフリカの地域構造を世界システムの中で読みとり、経済的發展を遂げつつある東南アジアと、後進国のまま停滞しているアフリカ地域の問題を捉えることが主なテーマであった。

西アフリカの構造線はまず南北にひかれる。北部内陸乾燥地帯と南部湿潤海岸地帯である。これは生態的な差に起因する明確な線である。そして北部内陸地域は豊かであり、海岸部は貧しい。北部のサバンナ地域は穀物の生産性の高い豊かな農業地域であった。そしてそこにサハラ交易が展開した。金を求めた地中海商人、アラブ商人で賑わったのがサヘルである。

東西の構造線も見逃せない。第一次生産の歴史が深いのは西部であり、さらに交易ルートも西に偏る。交易都市の繁栄した豊かな西部は、植民地侵略にも凄惨な抵抗をし、壊滅的打撃を受ける。東部は、皮肉なことに、その後進性と「内陸性」から、植民地政策による大きな変化を受けなかった。

以上のように西アフリカの構造を分析したうえで、嶋田氏は、サハルの貧困の要因を、ヨーロッパの植民地化によるサハルの内陸化として捉えた。交易の海＝サハラが封じ込められることにより、連綿と続いた内陸交通網が遮断されサヘルは陸封され貧困となった。孤立した地域がヨーロッパによって開けたとする近代世界システム論は誤りであり、それ以前にグローバルな交流網は存在し、近代世界システムはただそれを破壊的に再編したにすぎない。そして、東南アジアの今日の繁栄は世界システムを、その海域性から、従来の交易網と矛盾することなく受容した点であると結論づけた。

古川久雄は、交易の重要性は認めつつも、その基盤となった乾燥地帯のシステムに留意したコメントを行った。ユーラシアからサヘルまでの乾燥地帯では、古くBC8000年から、オアシス農耕という技術的に完成度の高い農耕システムが成立していた。東南アジアとの比較で言えば、モノ・カルチャー的性格の極めて強い農耕システムである。オアシスの城郭都市の支配者は、農作物を戦略物資とまで考えていた節がある。この点は東南アジアのミックス・クロッピングの伝統と大きく異なるとした。

最後は、内陸アフリカについてである。この地域に関しては市川光雄がまず生態史的背景を説明し、ついで掛谷誠が内的フロンティア世界としての特性を論じた。

市川によると、内陸アフリカ社会の特徴は、「小世界の林立空間」と「社会的な流動性」である。「移動と分散」が特徴づける概念であり、長い歴史と生態学的背景を持つ。

アフリカの生態区分を行うとギニア湾を中心に同心円的に植生が広がっている。中心の熱帯多雨林からサバンナさらには北のサハラと植生は湿潤傾度に沿って変遷する。そして各植生区で、生態に適応した安定した世界を形成しているかのように見える。しかしながらアフリカの環境と人間の営みは何度も激しい変動に見舞われており、「社会的流動性」はその環境変動の過程で起きた「移動・分散」であると市川は考えている。また、アフリカの農耕であるスーダン農耕文化も、この環境変動にもまれ成立したと考えられる。

アフリカの移動の特徴は、その飛び石を伝うような速さである。人口圧や耕地不足といった要因から起こる徐々に分布を拡げるような移動とは異なっている。広範な範囲を疾風のように駆け抜ける移動である。特に環境変動によって人々が非常に広範な移動をしたことが注目に値する。

掛谷誠は、この移動・分散する社会を「内的フロンティア世界」として捉える。農民であれ定住志向をもたず移動・分散を繰り返す。ここでは部族は、流動的な人々が離合・集散する中で形成された常に新しい社会である。

移動・分散の習性は民族の個別性を超えた内陸アフリカ共通の特徴である。広く薄い資源利用を基本とした自然利用のジェネラリストであり、「エキстенシブな生活様式」をとる。生産物は平準化のメカニズムによって分配されてゆき、都市や文明といった超越的な枠組みをもたない。

ただ、まったくなかったわけではない。サバンナの帝国として有名なルバは、交易と生産性を背景に、唯一アフリカ内陸で自生的に形成された帝国である。しかし、この帝国の成立と盛衰も、移動・分散をベースにフロンティア社会を永続的に再生産してゆく内陸アフリカの論理に従う。人口の密度化は部分的に進むが、それは新たな移住の波を引き起こし、新たな型のフロンティア社会を創り出すことになる。

掛谷によると、移動と移住の構造は、周辺部に広大な人口希薄地域と政治的空白地帯を常に生み出し、内陸アフリカに流動的な政体が消長する歴史を刻み続けさせてきたことになる。大陸の内部で自生的に展開した、内に拡がるフロンティアの歴史である。

市川・掛谷に対するコメントは山田勇が行った。比較の際に、地理的・歴史的スケールの違いをどう克服してゆくかについて触れた上で、東南アジアのフロンティア世界の例としてボルネオの熱帯多雨林の例を示した。ボルネオのフロンティアは資源収奪が目的である。木材伐採

キャンプがそうだが、資源に群がるかたちで社会ができる。この社会は刹那的であり、資源の枯渇とともに解体される。移動も資源を追いかけるかたちでおこる。ボルネオの貴重な資源の一つ沈香を求める人の動きがそうである。

ここで山田は、東南アジアの熱帯多雨林がもつ格段の資源量の豊かさを重視する。資源量の大きさと多様性は、消長を繰り返すフロンティア社会に連続性をもたらす。資源を中心に集住するフロンティア世界が、資源の豊かさに支えられて見かけ上無限に再生されて行くのが東南アジアのフロンティアの特徴といえる。

引き続いて総合討論は立本成文の司会で行った。「移動と分散」、その移動の「外因性と内因性」などが比較の軸として議論されたが、この総合討論では比較の軸を設定するよりもむしろ、アフリカと東南アジアの全体像を比較することに注意が払われた。議論の詳細は、成果報告書シリーズ『東南アジアとアフリカ』として出版する予定である。話題提供者・コメンテーター以外に、松原正毅・家島彦一・田中耕司・田中二郎・和崎春日・阿部健一が討論に参加した。

#### 4. 研究の成果とフロンティア

この重点領域研究発足以来、手探り状態で「地域間研究」を行ってきた。3年目にいたって、ようやく地域間研究というのが役に立ちそうだ、という感触を得ることができた。他地域との比較なくしては東南アジア地域全体の理解はできない、という考えに基づいて始めたが、地域比較によりおぼろげながら、しかし確実に東南アジアの全体像を浮かび上がらせる作業は進みつつある。それがどのようなモノであるかは、今後、最終的な成果として現れてくるであろう「作品」に示されることになる。ここではむしろ、地域間研究の過程で生まれた「発見」ともいえる点について、簡単に触れておこう。

ひとつには「ターム」の問題がある。同じ言葉を使っても、それぞれの地域の研究者にとって意味が微妙に異なっている。「移動」ということでもアフリカのそれと、東南アジアでは大きく異なる。「ネットワーク」と一言でいっても、東南アジア海域世界のネットワークと華僑のネットワーク、さらにはイスラム世界のネットワークではその成り立ちが違う。細かく挙げればきりが無いが、こうした差異・ズレを確認できたことは大きい。また「小人口」「フロンティア世界」「周辺性」といった東南アジア研究で使われるキーワードも、東南アジア地域にのみ使われる概念ではない。アフリカ地域研究に応用した場合、また違った文脈で用いられることになる。そうして、こうした差異・ズレを手がかりに、地域の特質を比較、議論すること



も可能になる。

今ひとつはどうも地域間研究でないとできないことがありそうだということである。地域と地域の比較ということは、とりもおさず比較の単位として、自分の対象としている地域の全体像・核心を抽出する作業を地域研究者に要求する。相手地域の特質を理解しようとする前に、自らが対象とする地域の理解が必要となる。

地域研究がそれぞれのディシプリンによる詳細な情報の集積であればよいのなら、地域間研究はさほど意味をもたない。分析の手段として比較はおこなうだろうが、とくに「地域」と「地域」の比較を持ち出す必要はない。しかし地域研究の目的を、単に地域の理解にとどまらず「ポスト・モダンの新秩序を創り出すためのもの」としたとき、普遍的なるものに抗して地域の尊厳を認め、地域と地域の共存を図るための学問としたとき、地域間研究はきわめて重要な地域研究の手法となる。世界に存在する地域を措定し、そのさまざまな価値観を理解することが、地域の共存をはかるための前提条件であるからである。

分担者の一人應地の言葉を借りれば、「地域間研究の必要性和有用性の確信犯」となったことになる。

## 5. 今後の課題

「南アジア」「中東」「中国」「アフリカ」と地域間研究をおこなってきた。この続きとして、あと2地域ほど、比較を試みたいと思っている。そして最後に一連の2地域比較研究の総括として、世界の中の東南アジアの位置を明らかにする研究会を持ちたいと思っている。その研究会の前後には、「東南アジアと日本」という地域間研究が必要となるかもしれない。

## 6. 研究業績（平成7年度発表）

高谷好一

「東南アジアの構想力 ― 〈想像の共同体〉論批判を通じて東南アジアを考える」『総合的地域研究成果報告書シリーズ』No. 13, 1996.

「エリアスタディの現状と課題」『地誌研年報』（広島大学）5号, 1996.

「〈地域哲学〉の提唱」『人間文化』（滋賀県立大学）Vol. 0, 1996.

「私の地域間研究」『総合的地域研究』第12号, 1996.

応地利明

『インド・道の文化史』（分担執筆）春秋社, p. 15, 1995.

『地理学概論』(分担執筆)朝倉書店, p. 21, 1995.

『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』(分担執筆)東大出版会, 1996(近刊).

『農耕空間の多様と選択』(分担執筆)大明堂, p. 25, 1995.

「Traditional rice cultivation methods and a survey of plows in Thailand with special reference to the development of plow technology」『東南アジア研究』 Vol. 33: 145-180, 1995.

「前近代アジア都市論構築のための試論」『建築思潮』 Vol. 3: 115-126, 1995.

"Urban Morphology of Japanese City: A Historical Analysis" *Conference on Exploring Japanese Urban Experience*, Kentucky Univ. pp. 14-15, 1995.

#### 掛谷 誠

「アフリカ疎開林帯における焼畑農耕社会の持続と変容」『学術月報』 Vol. 48(No. 9): 25-30, 1995.

「変貌するアフリカ伝統社会と癒しの構造」『地域開発』 Vol. 374: 28-32, 1995.

「フロンティア世界としてのアフリカ — 地域間比較に向けての覚え書き — 」『総合的地域研究』 No. 12: 10-13, 1996.

#### 松原正毅

『世界民族問題事典』(編集代表)平凡社, 1995.

#### 家島彦一

「インド洋海域の文化史とアジアの概念を見直す」『通信』 No. 84: 1-9, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1995.

「モンスーン航海の道」季刊「アジアフォーラム」アジアクラブ, No. 77, pp. 38-43, 1995.

「旅と出会い — 地域間研究の原点を求めて」『総合的地域研究』, 1996.

「インド洋海域世界の視点から」『海から見た歴史 — ブローデル『地中海』を読む — 』藤原書店, pp. 125-142, 1996.

「黒海・東地中海圏における人の移動と海神信仰 — とくにヒズル信仰を中心に — 」日本オリエント学会大会(於立教大学), 1995.

「ヒト・もの・情報の交流史 — 壮大なイスラーム・ネットワークに分け入る」『講座 イスラームの歴史と現在』栄光教育研究所主催, 1995.